

「ゴブリン・マーケット」における セクシュアリティと暴力

市 川 純

序論

クリスティーナ・ロセッティ (Christina Rossetti) は 1893 年 6 月 1 日にエドマンド・ゴス (Edmund Gosse) に宛てて書いた手紙の中で、以下のように述べている。

— and in my own intention Goblin Market was no allegory at all, so it does not surprise me that it is inexplicable in detail; neither was the Prince's Progress an allegory. (*Letters* 4, 325)

ロセッティは執筆から 30 年以上経って、「ゴブリン・マーケット」 (“Goblin Market” 1862) は寓意的な物語を意図して書いたものではないと言っている。しかし、仮に上記の記述を信じるとして、本人が意図して書かなかったとしても、この作品には宗教的寓意が読み取られてきた。「ゴブリン・マーケット」に関してはこれまで様々な論考が著されてきたが、それぞれに共通した基本的見解として、「誘惑」 (temptation) 「墮落」 (fall) 「贖い」 (redemption) という一連のキリスト教的寓意が含まれていると言われてきた (McGann 113)。

確かに、篤実なクリスチャンであり、宗教的な詩篇を幾つも残したロセッティにおいては、詩集を編纂すれば脚注は聖書からの出典に溢れることになる。また、生涯に二人の男性から求婚されるも、断ったのは、自らのアングロ・カトリックとしての信条と彼らとが相容れなかったことが大きいと考えられている。従って、このようなロセッティによって書かれた「ゴブリン・マーケット」は、たとえ意図的でなかったとして

も、つまりは無意識のうちに、宗教的意味合いを相当に付与されたとしてもおかしくない。だが、単に宗教的寓意に留まった作品でないことは明らかであり、批評家はこの作品を様々に掘り下げ、解釈してきた。たとえば、サンドラ・M・ギルバート（Sandra M. Gilbert）とスーザン・グーバー（Susan Gubar）はフェミニスト的視点からこの作品を論じ、ミルトン（John Milton）の『失樂園』（*Paradise Lost* 1667）やキーツ（John Keats）の「つれなき美女」（“La Belle Dame sans Merci” 1819）を取り上げ、それらとの共通点と差異を明らかにしている（564-75）。シャロン・スマルダーズ（Sharon Smulders）は本作に見られる姉妹同士の強いつながりを、ラファエル前派兄弟団（Pre-Raphaelite Brotherhood）におけるホモソーシャルな男性同士のつながりと比較して論じている（32-43）。また、U・C・クヌプフルマッハー（U. C. Knoepfelmacher）は、当時の様々な児童文学と比較しながら、「ゴブリン・マーケット」は一種の女性の成長を描く詩（“a progress-poem” 324）として読めることを示している。

このように、「ゴブリン・マーケット」は奥行き幅広い読解を可能とするテキストである。それらを踏まえた上で、ダイアン・ダミーコ（Diane D’Amico）は敢えてキリスト教的象徴やロセッティの信仰の問題に立ち返ってこの作品の解説を試みている（68-83）。

いずれの解釈にしても、先にあげたキリスト教的三つの寓意が基本となり、その上でさらなる解釈の広がりや価値をこの作品に見出すものである。そして、この小論もその流れを崩すものではなく、宗教的寓意の存在を否定しない。ただし、この作品に宗教的寓意が含まれているとしても、当時の一般読者や今日の批評家がそれだけで納得してこなかったのは事実である。「ゴブリン・マーケット」は禁欲的なキリスト教的寓話の次元に収まることはできず、官能性を存分に湛えた作風となっているのだ。

そこで本論は、「ゴブリン・マーケット」がプラトニックな宗教的寓意性と背中合わせに持っている極めてセクシュアルな要素を炙り出し、それをロセッティが感じていたであろう当時の社会的問題と関連させて論じる。それにより、この作品のさらなる奥深さを明らかにし、キリスト

教的寓意と同時に含有される当時の社会的問題への意識を議論する。

1. 「ゴブリン・マーケット」の官能性

初めに、以下に続く議論の前提として、「ゴブリン・マーケット」の大まかな粗筋を述べておく。

しっかり者の姉リジー（Lizzie）と、好奇心旺盛な妹ローラ（Laura）は、美味しそうな果物を売る子鬼のゴブリンたちに声をかけられる。これを危険と判断したリジーは彼らを見捨てるが、ローラは誘惑される。リジーが止めたにも関わらず、たまたまなくなったローラはゴブリンのところへ行き、果物を食べてしまう。するとローラはたちまち体が衰え、病魔に伏す。ローラを助けるために、リジーは危険を顧みずゴブリンたちのもとへ行き、果物を手に入れ、その汁をローラに与える。これによってローラは回復し、晴れて健康的な日々が戻る。後日談として、その後二人は結婚し、子供を儲け、娘時代のこの体験は語り継がれる。

先に挙げた「誘惑」「墮落」「贖い」の三つの要素は、ここに明確に読み取ることができる。その図式に当てはめると、ローラはゴブリンの姿をしたサタンに誘惑されており、果物は禁断の果実を表し、病床に就くことで墮落を表し、命がけでゴブリンと渡り合った姉のリジーによってその罪は贖われる。

だが、このようなキリスト教的意味合いを持っているにしても、プラトニックで教条的な作風とはならず、むしろ、強い官能を読者に喚起する描写が散見されるのも事実である。

たとえば、少女ローラを描く以下の記述に注目してみよう。

Laura stretched her gleaming neck
Like a rush-imbedded swan,
Like a lily from the beck,
Like a moonlit poplar branch,
Like a vessel at the launch
When its last restraint is gone. (81-86)¹

少女の煌くうなじは白鳥、百合、月光に照らされるボプラの枝、さらには小船へと次々に比喩が繰り出され、そのほの白い官能性が強調されている。このような美しい少女の肌の描写は、プラトニックな宗教的文学においては異例であろう。「ゴブリン・マーケット」は童話的な設定もその特徴の一つであるが、童話や児童文学の文脈においては艶かしさがいき過ぎている。この作品は 1862 年に *Goblin Market and Other Poems* に収録されて出版されたが、その数年後に発表されるルイス・キャロル (Lewis Carroll) の『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland* 1865) を例に挙げても、アリスの肌そのものへの言及は少ない。少女に対する強い嗜好を持っていたキャロルの作品においても、官能性という点においては控えめなのである。

ローラはゴブリンから果物を購入するが、金の持ち合わせが無いローラが代わりに要求されたのは、金色の髪の手である。身体の一部を要求されるのは生々しい印象を与えるし、少女が自らの一部を金銭の代わりに差し出す行為には残酷で背徳的な雰囲気醸し出される。この場面は兄のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti) が絵にしており、初版の口絵として付けられた。² そこでは有象無象の獣達が絵の右側に溢れ、左に座るローラの金髪の一部が獣のうちの一匹の首に絡み付いている。これもまたスマルダーズが指摘するように官能的 “sensuous” であり (42)、「ゴブリン・マーケット」は画家にエロティックな要素を読み取らせていた。

ローラの艶かしさは、その容姿の描写に留まらず、行動にも表れる。それが一番顕著なのは、金髪の手と引き換えに買った果物を啜る様子である。

She clipped a precious golden lock,
She dropped a tear more rare than pearl,
Then sucked their fruit globes fair or red:
Sweeter than honey from the rock,
Stronger than man-rejoicing wine,
Clearer than water flowed that juice;

She never tasted such before,
How should it cloy with length of use?
She sucked and sucked and sucked the more
Fruits which that unknown orchard bore;
She sucked until her lips were sore; (126-36)

自らの身体の一部を切り取ることによる心の痛み、そしてその代償として得られる果実のこの上ない甘さがここでは融合し合っている。何度も繰り返される“suck”により、衝動に突き動かされて果汁を貪りつくスローラの姿が生き生きと描写されている。ここに性的なニュアンスを読み取ることは決して過剰な想像力の産物ではないだろう。

獣の姿をした行商人から果物を買うという極めて童話的な筋書きではあっても、上記の描写は他ならぬエロティックな感情をかき立てるものである。クヌプフルマッハーは、この詩が子供読者にとって魅力的な素材と、ポルノグラフィーに近い描写とが混ざり合って当時の批評家をも困らせたと言っている（320）。

では、このように「ゴブリン・マーケット」を官能的なもの、宗教的寓意と同時にエロティックな要素を含むものとして読解することはどれだけ妥当なのだろうか。クヌプフルマッハーも引いているのが（320）、以下の1863年における『マクミランズ・マガジン』（*Macmillan's Magazine*）に掲載された書評である。評者のノートン夫人（The Hon. Mrs. Norton）は「ゴブリン・マーケット」を賞賛し、非現実と現実それぞれの要素を絶妙に織り合わせた点でコウルリッジ（Samuel Taylor Coleridge）の「老水夫の歌」（“The Rime of the Ancient Mariner” 1798）に引けをとらないとまで述べているのだが（404）、重要なのは彼女が「ゴブリン・マーケット」に二重の読みができることを出版当時から示していたことである。

Is it a fable — or a mere fairy story — or an allegory against the pleasures of sinful love — or what is it? Let us not too rigorously inquire, but accept it in all its quaint and pleasant mystery, and quick and musical rhythm — a

ballad which children will con with delight, and which riper minds may ponder over, as we do with poems written in a foreign language which we only half understand. (401-02)

子供のための無邪気なおとぎ話なのか、或いは大人向けの罪深い愛の寓話なのか、評者は判断を下すことができない。むしろ、どちらの読みの可能性も認め、子供読者の楽しみにも、また大人読者の思索にも耐えうる作品であることを主張している。

このように、「ゴ布林・マーケット」は童話的道具立てにより、確かに子供にも読めそうな物語を組み、宗教的寓意を含ませている。それゆえ、キリスト教的な教訓を示す作品ともなっている。だが、それと同時に、極めて官能的な描写が見られることも事実であり、作品は決してプラトニックな世界のみを提示するものではない。むしろ、極めてエロティックな要素も強く、それが大人の読者を惹き付けるとい言説が発表当時から今日に至るまで存在している。

このように官能性を汲み取る読みは、決してロセッティの宗教的誠実さを否定するものではない。むしろ、宗教性と世俗性が同居していることの表れではないのかと考えられる。

「ゴ布林・マーケット」において禁断の果実を食べたローラは墮落する。これは「禁じられた性的快楽」(“forbidden sexual pleasure” D’Amico 71)³を味わったが故の結果である。この作品は宗教的寓意性と同時に官能的描写を多く用いているが、この節では主にローラの動作を中心的に考察した。ローラの官能性は禁断の果実を食べ、禁じられた快楽を味わい、そして墮落するという、宗教的禁忌に触れたことによる背徳によって際立っている。

2. 「ゴ布林・マーケット」の暴力性

妹を救うべく立ち上がる姉のリジーはローラとは対照的な存在であるが、彼女を描く場面もまた、性的な要素が濃厚である。ただし、リジー自身が背徳的な行為に手を染めるのではなく、リジーが性的な暴力の犠牲になるのである。そこにはある種の陰惨さが伴う。

「ゴブリン・マーケット」には恐怖が喚起される場面がある。恐怖を感じさせる理由は第一に、異様な外見のゴブリン達が狂喜乱舞し、果てはリジーに狼藉を働く様子があまりに恐ろしいからだ。妹を助けるためにゴブリンに会いに来たリジーが、ゴブリンの招きを断って帰宅しようとする、ゴブリンは以下のように暴力的になる。

Lashing their tails
They trod and hustled her,
Elbowed and jostled her,
Clawed with their nails,
Barking, mewling, hissing, mocking,
Tore her gown and soiled her stocking,
Twisted her hair out by the roots,
Stamped upon her tender feet,
Held her hands and squeezed their fruits
Against her mouth to make her eat. (398-407)

上記引用部に限ったことではないが、ロセッティお得意の文法的に同種の語彙を畳み掛ける用法がここでも駆使され、一文はうねるように長く、我々はゴブリンの動作に圧倒される。息もつかせぬ文体により、彼らによる長く残酷な折檻が描写されている。

ラファエル前派のローレンス・ハウスマン (Lawrence Housman) は「ゴブリン・マーケット」の挿画を描いているが、上記場面を描いた挿画はとりわけ不気味であり、三白眼で虚ろな表情をしたリジーが四方八方から獣の姿のゴブリンに囲まれ、がんじがらめにされて髪も引っ張られている様子が示されている。⁴ この絵はハウスマンによる解釈によって描かれたものだが、獣の姿をした男達が寄ってたかって集団暴行を行っているかのような印象さえ与える挿画である。

ゴブリンに襲われるリジーの残酷な場面はキリスト教的な寓意の文脈から捉えれば、ギルバートとグーバーが指摘しているように、女性版救世主の姿であって、リジーが身を挺してゴブリンと交渉した構図はキリ

ストとサタンの関係を示す（566）。だが、同時にエロティックな読みの可能性もまた当時から示されていたことは前節に示した通りである。その場合、上記引用からは獣の姿をまとった、つまりは匿名性を帯びた男性達によって性的暴力を受ける少女の姿が浮かび上がる。それに、ゴブリンの暴力は直接リジーの肉体に対する打撃を食らわせているだけでなく、被服の破壊と汚損にも及んでいる。ここに性的ニュアンスがあることは明らかである。禁断の果実を食した妹を救うためにリジーが受けた暴力は獣の姿をした男性からの「サディスティックな虐待」（“sadistic abuse” Knoepflmacher 319）であり、宗教的寓意の隣には男性的な欲望とその欲望の暴発に恐怖する女性の姿が提示されている。

ローラの罪の贖いは、リジーがゴ布林からの虐待に最後まで耐えることによって叶えられる。贖罪が完遂する場面では、先の引用で無理やり口に押しつけられた果物のせいで、リジーは顔中汁だらけになる。

Tho' the goblins cuffed and caught her,
Coaxed and fought her,
Scratched her, pinched her black as ink,
Kicked and knocked her,
Mauled and mocked her,
Lizzie uttered not a word;
Would not open lip from lip
Lest they should cram a mouthful in:
But laughed in heart to feel the drip
Of juice that syrupped all her face,
And lodged in dimples of her chin,
And streaked her neck which quaked like curd. (424-36)

ここで散々な暴力を受けた後のリジーの首を伝う果汁の色が、敢えて乳白色の凝乳（“curd”）に例えられているところは興味深い。何の果実の汁なのかは明らかでないが、冒頭に登場するリンゴやマルメロ、レモン、オレンジといった色彩豊かな果物の果汁と比べて異質である。この

凝乳という比喩は性的なニュアンスを含んでいる。

ただし、果汁を口にしたローラと違って、リジーが決して口を開けなかったことは重要である。リジーはゴ布林から性的な暴力を受けても、屈して一線を越えることはなく、耐え抜くことで救世主となる。この後、ローラはリジーの体に滴る果汁を吸うことで回復するが、リジーが体にまとっている果汁はゴ布林による暴力や誘惑に耐え抜いたことによって得られたものであり、それをローラに与えることでローラの男性との性体験を無化し、清めている。「ゴ布林・マーケット」には確かに性的要素がある。しかし、男性を対象とはしておらず、むしろ男性に対する恐怖があり、代わりに強固な姉妹愛が描かれるのである。

ギルバートとグーバーは、この詩にゴ布林以外全く男性が登場しないことから、「ゴ布林・マーケット」は母系的、家母長的世界、さらに暗示的にはレズビアン的世界を示していると主張する（567）。確かに、姉妹と男性との交流は全く描かれておらず、作品最後に両者が結婚したことが示されても、夫は登場しない。その点において、この作品は男性恐怖症的であり、潔癖だ。そしてそのように潔癖なほど男性を排除した中で、唯一の男性的表象たるゴ布林がこのように暴力的で背德的であることは、男性の性的側面に対する不信が現れている証拠である。

では、何故このように強い男性不信が「ゴ布林・マーケット」には表れているのだろうか。ここには、ロセッティ自身の問題意識が多分に影響しているのではないかと考えられる。次節では、ロセッティの生きた時代の社会的背景や伝記的事実を踏まえて、この問題を考察する。

3. ヴィクトリア朝における虐待された女兒とその救済

これまでの節に見たように、「ゴ布林・マーケット」においてリジーやローラはゴ布林に性的な暴力を受けていると読むことが可能である。だが、ただ単に読めるだけの問題ではなく、実際にロセッティが置かれていた時代的狀況を考慮すると、詩人は本当にそのような暴力に対する恐怖心を抱いていたのではないかと、そして、そのような恐怖を喚起する狀況が、当時のイギリスにはあったのではないかとさえ考えられる。その歴史的根拠を示すため、この節ではヴィクトリア朝の子供が受

けていた性的虐待について具体的に示し、「ゴ布林・マーケット」における性的描写と結び付けて考えてみたい。そして、当時の社会問題に対するロセッティの意識を考察する。

「ゴ布林・マーケット」が書かれたのは1859年4月27日とされている。⁵ この時代は、ヴィクトリア朝における子供の性的虐待を巡る歴史を検証する上で重要な転換期である。というのも、ルイーザ・A・ジャクソン (Louise A. Jackson) によると、イングランドにおける性的虐待は1860年代以降になって「発見」(“discovery”)された(4)。その理由は、この時期に社会純化(“social purity”)、つまりは性的な純潔を重視する組織や、子供の福祉を考える運動が起こったことによる(4-5)。ロセッティが「ゴ布林・マーケット」を執筆した時期は、このような動きが起こり始め、子供の性に関する問題が社会的規模で考えられた最初の時代だったのだ。

ただし、付言してしかるべきは、ここで言う子供は女子のみを指しており、男子児童は含まれていないということである。「墮落した」(“fallen”) 女児や若い売春婦に対する福祉的な意識が目覚めたといっても、それはヴィクトリア朝の規範においての「墮落」であり、男児は「墮落」しないと考えられていたのである(Jackson 5)。

従って、これから提示する性的虐待に関する調査結果は、女児のみが「墮落」しようと考えられていた時代に生まれたものであることを考慮に入れておくべきである。ただし、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) が逮捕されたことを通しても知られているように、ヴィクトリア朝時代には少年の男娼が存在する。だが、それでも男児は「墮落」することがない、出来ないと考えられていた。男娼もヴィクトリア朝を語る上での暗い側面の一つではあるかもしれないが、女児はたった一度の行為で「墮落」しなければならなかった。そのような当時の規範を踏まえた上で、この時代の性的虐待に関するデータを参照してみる。

ジャクソンはヨークシャー、及び首都ロンドンを含むミドルセックスにおける裁判所で起訴された1146件の性暴力事件を集計し、1830年から1910年までのデータを5年間隔にしてその内訳をまとめている(18-21)。それによると、記録されているケースだけでも、ミドルセックス

四季裁判所 (the Middlesex Quarter Sessions) では 67 パーセントの被害者が確実に子供であり、22 パーセントが成人、11 パーセントは年齢不明となっている。同様に、オールドベイリーの中央刑事裁判所 (the Central Criminal Court at the Old Bailey) では 64 パーセントが子供、ただし、ヨークシャーでは割合がそれらよりも低く、ヨークシャー巡回裁判 (the Yorkshire Assizes) では 46 パーセント、ウェストライディング四季裁判所 (the West Riding Quarter Sessions) では 41 パーセントとなっている。総合すれば、大都市の性暴力に関する裁判のうち、大都市ではその三分の二が、ヨークシャーでは約半分が児童を相手にした性的虐待に当てはまるのである。なお、ここでいう子供、児童とは 16 歳未満を指す。

このように、ヴィクトリア朝における性暴力被害のうち、子供の割合は圧倒的に多かった。そして、このような被害にあった子供たちは「墮落」の烙印を押されねばならなかったのである。

「墮落した」女性が悲劇的運命を辿らねばならなかったことは、ハーディ (Thomas Hardy) の『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles* 1891) を始め、ヴィクトリア朝時代の文学作品によく表象されている。ジャクソンによると、そのような女性が女兒だった場合、もはや「子供」とは見なされず、社会的な害悪とされ、専門的な施設での再訓練と改善が必要とされた (6)。

この時代、「墮落」の烙印を押されてしまった女兒はどうすればよかったのか。「ゴ布林・マーケット」では、自らを犠牲にして姉のリジーが救世主として現れるが、ヴィクトリア朝において「墮落」の烙印を消去できるものはなかった。しかし、更正施設はいくつか存在していた。そして、それはロセッティの伝記的事実と重要な関係を持っているのだ。

ロセッティは 1859 年の 8 月までにはハイゲート・ヒル・ロンドン聖マグダラのマリア教区更正所 (the London Diocesan Penitentiary of St. Mary Magdalene's on Highgate Hill) で働き始めており、この施設こそ「墮落した」女性を受け入れ、更正させる施設だったのである (D'Amico 104)。ここで女性は、二年を超えない滞在期間の中で家事や裁縫の訓練を受けることで、手に職をつける道を見つけていた

(D'Amico 105)。ロセッティはアソシエイト・シスター (associate sister) という身分でここに勤め、読み書き計算などを教えていたと思われる (D'Amico 107)。

このような事実を考慮に入れば、「ゴ布林・マーケット」執筆にはロセッティの更正所勤務による影響を想定したくなる。ただし、先述したように、「ゴ布林・マーケット」の執筆は1859年の4月とされており、少なくとも同年8月までには更正所での勤務を始めたという事実には照らし合わせて、執筆時期が勤務時期と重なっているとまでは言い切れない。ただ、ダミーコによれば、ロセッティは1859年の春までには教会が「墮落した」女性を助けてくれる女性を求めていることをよく知っており (D'Amico 108)、「ゴ布林・マーケット」執筆において、彼女は「墮落した」女性の存在を日頃意識していたのではないかと考えることが出来る。

それに、たとえ作品執筆開始までに更正施設で働いていなかったとしても、既に述べたように、この時代の社会においては子供の性的虐待に対する関心が高まっており、各種の福祉的運動の萌芽が見られた。そのような環境で「ゴ布林・マーケット」を執筆したロセッティには、女兒に対する性的虐待の意識が少なからずあったのではないだろうか。

このような社会状況と伝記事実を踏まえて、「ゴ布林・マーケット」の結論部が何を示しているかを考察すると、そこにはロセッティの克服できない男性恐怖が見られる。

結末では、結婚して子を儲けた姉妹が描かれているが、夫の姿は全く描かれず、その存在感は希薄である。最後にローラは自分の娘に以下のように語りかけて、作品は幕を閉じる。

“For there is no friend like a sister
In calm or stormy weather;
To cheer one on the tedious way,
To fetch one if one goes astray,
To lift one if one totters down,
To strengthen whilst one stands.” (562-67)

結婚し、子を儲けるというヴィクトリア朝の中産階級の女性として規範的な枠組みに収まっているが、「ゴ布林・マーケット」全体の締めくくりとして強調されるのは姉妹愛である。ここに男性の入る余地はなく、結婚によって夫の精神的支柱を得られていない。ロセッティの男性恐怖は最終的に克服されていないのである。女性の受けた苦しみや罪は女性（ここでは姉のリジー）によってのみ救われ、男性の救世主は現れない。むしろ、表向きは結婚して子を儲けるという規範的な生き方を示してはいても、描写のレベルでは徹底的に人間の男性を排除することで、男性に対する恐怖心を垣間見せているのではないだろうか。

「ゴ布林・マーケット」に充溢する官能的な描写は、少女とゴブリンの間では暴力的、背徳的なものとなっている。これは、ゴ布林が恐怖の対象としての男性を象徴しているからだ。しかし、官能性は抑圧されるのではなく、むしろ姉妹間の果汁の交換によって濃密に描かれる。これは、ゴ布林という男性的存在によって墮落し、汚されたローラを、もう一度無垢な状態に戻すための行為である。ゴブリンの誘惑と暴力に勝ったリジーと交わることで、ローラはゴ布林に墮落させられる前の状態に戻り、病から回復する。そうすることで、最終的には結婚して子を儲けることが認められるのだ。汚された女性は女性のみによって贖われ得るという考え方が、この作品では姉妹愛という形で描かれている。

結論

「ゴ布林・マーケット」の魅力は、童話的設定の中に宗教的寓意を含みつつも、それと背中合わせに極めて性的な、官能的描写を含ませ、様々なレベルでの読解を可能にする、多層的な作品であるところにある。当時の様々な画家による「ゴ布林・マーケット」に基づいた絵画作品は、そのことを象徴的に表している。

ただし、この作品における性的描写は、単に禁断の快楽を描いているのではなく、当時の社会問題である女兒の性的虐待に対する恐怖、ひいてはロセッティ自身の男性恐怖も示しているように思われる。一度でも性的虐待を受けてしまえば「墮落」し、施設に送られ、その後の人生を

狂わされてしまう。そのような状況に対する不安がこの作品には投影されている。この男性に対する恐怖は男性を作品から駆逐し、ゴブリンという異様な形態に結実する。そして、最終的に贖罪は女性によってのみなされるという、ある種極めて潔癖な救済が示されるのである。

彼女の強い信仰心は「ゴブリン・マーケット」を「誘惑」「墮落」「贖い」という三つの要素によって構成的にまとめ上げてはいる。だが、そこにはロセッティの男性に対する強い不信感が込められており、それは同時代に社会問題となっていた、女兒の虐待が関係しているのである。

Notes

¹ 「ゴブリン・マーケット」からの引用は全て *The Complete Poems of Christina Rossetti*. Vol. 1. に基づき、行数を括弧内に記す。

² 該当の口絵は Smulders, p. 43 参照。

³ ただしダミーコは世俗的なエロティシズムの文脈よりも、宗教的象徴性を重視した読解を展開している。

⁴ ハウスマンの挿絵は、風間賢二編『ヴィクトリア朝妖精物語』収録のクリスチナ・ロセッティ、矢川澄子訳「妖魔の市」で見ることができる。

⁵ 詳細は使用した底本 p. 234 の Textual Notes を参照。

Works Cited

D'Amico, Diane. *Christina Rossetti: Faith, Gender, and Time*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1999. Print.

Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979. Print.

Jackson, Louise A. *Child Sexual Abuse in Victorian England*. London: Routledge, 2000. Print.

Knoepflmacher, U. C. *Ventures into Childland: Victorians, Fairy Tales, and Femininity*. Chicago; London: U of Chicago P, 1998. Print.

McGann, Jerome J. "The Poetry of Christina Rossetti." in *Pre-Raphaelite Poets*. Ed.

「ゴブリン・マーケット」におけるセクシュアリティと暴力

- Harold Bloom. New York: Chelsea, 1986. Print.
- Norton, Mrs. Charles Eliot. Review of “The Angel in the House,” and “The Goblin Market.” in *Macmillan’s Magazine*. 8 (1863). 398–404. Print.
- Rossetti, Christina. *The Complete Poems of Christina Rossetti*. Vol. 1. Ed. R. W. Crump. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1979. Print.
- . *The Letters of Christina Rossetti*. Vol. 4, 1887–1894. Ed. Antony H. Harrison. Charlottesville; London: U of Virginia P, 2004. Print.
- Smulders, Sharon. *Christina Rossetti Revisited*. New York: Twayne, 1996. Print.
- 風間賢二編『ヴィクトリア朝妖精物語』ちくま文庫、筑摩書房、1990.